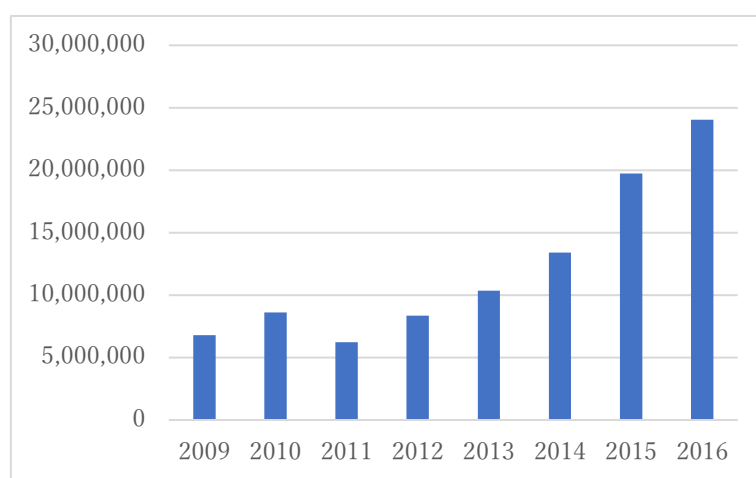


1 はじめに

ここにち、世界においては、年間4～5パーセントの観光客増加がみられる。特に日本についてみると、その数は一定して増加傾向をたどっている。日本への観光客が減少したのは2009年のリーマンショックおよび2011年の東日本大震災の時期に落ち込んだ時期だけであり、それ以後は増加している。2015年にはほぼ2000万人、2016年には2400万人にも達した（図表1）。



図表1 日本に訪問する外国人観光客の数（日本政府観光局の統計[2]より筆者作成）

日本政府は、このような外国人観光客の増加傾向と、その経済効果を高く評価している。この流れを受けて、2020年の東京オリンピック開催に向けて、英語で対応できるサービス部門を増やすなどの努力も行われている。しかしながら、文化遺産、特に聖地とも呼ばれる宗教的な遺産の場合、その美しさを観光資源に売り出して、観光客が写真を撮影して「消費」することで、聖なる場を「売り物」にしてしまうことは正しい方法であるかどうか疑わしい。本研究はこの問題意識から発している。

有名な日本の神社や仏教寺院、ヨーロッパの古い教会や修道院などは、人気のある観光の場になっているが、それらは、深い宗教的な文化と伝統を受け継いだ、人々の信仰を集める聖地である。したがって、ディズニーランドのような純粋に楽しむための施設とは異なった性格を持っている。

聖地を訪問する人々に、神聖な場所の本当の価値を理解し、敬意を払ってもらうためには、その場にふさわしい行動規範を研究する観光倫理（tourism ethics）の観点から、異文化である「場所への配慮（sense of place）」を可能にするための合理的な手引き（reasonable guidance）を提供することが必要である。

これまで、観光倫理というと、一般的な宣言のようなものとして知られているものがある。例えば、国連観光倫理機関が定めた「世界環境倫理憲章」第1条では、観光倫理は「人と人、社会と社会の相互理解、相互尊重」をめざしており、主に環境資源の持続可能な利用（エコツーリズム eco-tourism）や訪問先に住む社会的少数者（social minorities）の保護という点に重点が置かれている。しかしながら、これまで、宗教的な場所を観光に利用することと、それに関する倫理についての研究は非常に少ない。異なる国々の観光倫理を比較分析した原一樹の研究[4]は優れた分析が見られる数少ない先行研究であるが、聖なる場所への訪問に特に的を絞った研究というわけではない。また、R. Raij と K. Griffin の共著 *Religious Tourism and Pilgrimage Management: An International Perspective*（宗教的観光と巡礼者のマネジメント：国際的観点）[5]は、世界中の巡礼旅行と聖地巡礼者の動機を深く洞察した研究であるが、なお掘り下げるべき論点が残されている。すなわち「何がその場所を聖地として成り立たせているのか、その場所が特別だという考えを巡礼者に抱かせるものは何か」という論点である。聖なる場所への訪問者が増えている今日、さらに踏み込んだ研究が行われることが喫緊の課題である。

2 研究の方法と事例調査の対象

2.1 研究の問いと目的

宗教的な聖地を訪問する観光客（巡礼者ではない人）の多くは、事前にその聖地について多くの情報を持っていないことが多い。特に、休暇を利用して初めてその聖地を訪問しようとする欧米人の多くがそうである。

例えば、多くの欧米人の観光客は神道についての知識がなく、神社の複雑な建築物の意味、空間設計と周囲の環境との関係などを理解できない。神道について理解していない状況は、神社を訪問する多くの日本人観光客にとってさえ言えることである。外国人観光客の場合は、それに加えて、この場所を訪問した時の正しい行動の仕方、祈りの仕方についての知識を持ち合わせていない。

同じことは、ヨーロッパの教会や修道院を訪れる日本人観光客についても言える。多くの場合、日本人観光客は、これらの場所についての宗教的なコンテキストやふさわしい行動を知らない。中には心理的な不安から教会や修道院の建物の中に入ることをためらう人もいる。

このような問題意識に基づいて、本研究では次の点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 聖地に神聖な意味を与えるものは何か。その神聖な意味を守るために必要なものは何か。

この観点から、日本の神社とキリスト教の教会や修道院との主要な違いは何か。

- (2) 聖地を訪れる観光客の行動、ふるまいはどのようなものか。
- (3) これらの聖地への観光に伴う問題があるとすれば、観光倫理の改善のために何が必要か。

2.2 現地調査

本研究では、有名な観光地になっている日本とヨーロッパの二か所の聖地を対象に、現地調査を行った。選定の理由は以下のとおりである。

- (1) 特別な背景のある立地条件を持つこと。
- (2) 何百年もの歴史を引き継ぐ地であること。
- (3) 現在もなお人々の宗教生活にとって重要な意味を持っていること。

これらの選定理由について以下で説明する。

(1) 世界の重要な聖地は偶然その場所に作られたものではない。特に日本の神社や仏教寺院においてもそのことが言える[6]。多くの場合、その場所が持つ宗教的な、またはその他の特別な意味が深く関係している。このような「場所の持つ特別な意味への感覚 (sense of place)」は、観光倫理に加えられるべき観点であると考えられる。

(2) その場所が重要な意味を持ち、それが長い歴史を持つことが、その場所に全国規模の意味が認められる要件となる。例えば京都や奈良は古い都があり、長い歴史を持つので、その場所がほかの場所とは違う観光の魅力ともなる。ウィーンやパリも同様である。日本とヨーロッパは異なる文化的背景を持つので、二つの事例を比較するために、この点で同様の条件を持つ場所を選定した。

(3) その場所が過去に宗教的な意味を持っていただけでなく、現在も人々の宗教生活にとって意味のある重要な聖地であることを条件とした。ヨーロッパでは、例えばドイツのエーベルバッハ修道院は過去の遺産として人気のある観光地だが、修道士はもう暮らしていない[7]。本研究においては、現在も修道士や神官が宗教的な活動を行い、人々が祈りに来る場所を条件とした。

上記の条件に合致する調査対象として、第一に、日本の伊勢神宮（三重県伊勢市）を選定した。伊勢神宮は古来より多くの人々が巡礼と観光に訪れる国民的聖地であり、他の多くの地域的な神社とは異なる全国規模の意味を持っている。2016年5月のG7伊勢志摩サミットで国際メディアに取り上げられてさらに有名になり、外国人観光客の訪問先として人気を高めている。

第二に、オーストリアのウィーン郊外にあるクロスターノイブルク修道院を調査対象に選定した。同修道院も、他の多くの地域的な教会や修道院とは異なり、ハプスブルク帝国のカトリック守護聖人を記念した全国規模の意味を持ち、古来より多くの人々が巡礼に訪れ、観光客を多く集める聖地である。

2.3 調査方法とデータ収集

オリジナルデータを入手するために以下の調査を行った。

- (1) 対象とする聖地と関連地域への現地視察
- (2) 関係者を対象とした半構造化インタビューと追加の聞き取り調査

上記の聖地の現地視察と、聖地における責任者クラスの職員、地域の産業・観光に関する責任ある人物への聞き取り調査を行った。以下の表1から表4はその一覧である。

表1 現地視察先（伊勢）

- | |
|--|
| ①せんぐう館（式年遷宮の博物館）
②外宮
③内宮（正式参拝）
④金剛證寺（歴史的にお伊勢参りの際に人々が立ち寄った仏教寺院）
⑤二見ヶ浦の夫婦岩（魂の浄化のために海に入る儀式を行った場所） |
|--|

表2 聞き取り調査の相手（伊勢）

- | |
|--|
| ①伊勢古市伊勢参宮街道資料館館長 世古富保様
②赤福株式会社社長 濱田典保様
③神宮司庁広報課課長補佐 音羽悟様
④伊勢市観光振興課主幹 中村洋様、伊勢市観光誘客課課長補佐 谷朋恵様
⑤伊勢商工会議所企画事業課課長代理 福田津代志様
⑥皇學館大学准教授 クリストファー・メイヨー博士（近世日本史）、皇學館大学教授 田浦雅徳先生（近代日本史）、皇學館大学教授 櫻井治男先生（神道文化論）
⑦御師丸岡宗大夫邸館長 丸岡正之氏
⑧伊勢市観光協会 西村純一氏
⑨伊勢市産業観光部 須崎充博氏ほか
⑩伊勢神宮林管理者 岡田氏
⑪三重県観光政策課長 加納明生氏 |
|--|

表3 現地視察先（ウィーン、クロスターノイブルク）

- | |
|--|
| ①ウィーン中心部の歴史地区
②ドナウ川とヴァッハウ地域
③クロスターノイブルク修道院（本研究の主な調査対象）
④ゲットヴァイク修道院（ヴァッハウ地域にある歴史的な修道院） |
|--|

表4 聞き取り調査の相手（ウィーン・クロスターノイブルク）

- | |
|--|
| ①ウィーン工科大学学際連携センター 技術・観光・景観計画部門主任 マインハルト・ブライリング博士
②クロスターノイブルク修道院 文化・観光マーケティング部門部長 ゴットフリート・フラグナー氏 |
|--|

- ③クロスターノイブルク修道院 ワインプロダクトマネージャー ヴォルフガング・ハム博士
- ④クロスターノイブルク修道院 アントン・ヘスリンガー司祭
- ⑤クノール環境計画設計事務所 ヨヘン・シュミット氏
- ⑥社団法人クロスターライヒ ヘルマン・パッシンガー氏、ゲットヴァイク修道院
観光・文化文門部長 エヴェリン・グルーバー氏
- ⑦ゲットヴァイク修道院 副修道院長 マクシミリアン・クレン氏
- ⑧ニーダーエスターライヒ博物館マネジメントディレクター ウルリケ・ヴィトヴェッチ氏
- ⑨ニーダーエスターライヒ地域広告事業団 戦略管理事業部門 シュテファン・バウアー氏

2.4 今回の分析対象

上の表に挙げた聞き取り調査は21回に及び、すべて録音の許可を得た。インタビューの時間は一人につき1時間から1時間半である。しかし、21回分の録音データをすべて文字起こしして分析するにはさらに時間がかかることから、本研究では、このうち、内容が特に充実した6件のデータに絞って分析を行うこととする。6件を選んだ観点は、三つの異なるステイクホルダーの観点（表5の「担当業務」の別）を盛り込むこと、それぞれのステイクホルダーの共通の立場から二か所（伊勢とクロスターノイブルク）の比較を行うことである。

表5 本研究の分析対象とした聞き取り調査

No.	所属、人物、インタビュー時間	担当業務
1	神宮司庁広報課課長補佐 音羽悟様 [01:14:22] (伊勢市)	聖地のPR、文化事業、訪問者の対応
2	クロスターノイブルク修道院 文化・観光マーケティング部門部長 ゴットフリート・フラグナー氏 [00:54:57]	
3	三重県観光政策課長 加納明生氏 [01:11:40]	州・県レベルの地域観光政策部門
4	ニーダーエスターライヒ地域広告事業団 戦略管理事業部門 シュテファン・バウアー氏 [00:46:56]	
5	皇學館大学教授 田浦雅徳先生 (近代日本史)と 皇學館大学教授 櫻井治男先生 (神道文化論) [01:23:26]	地域の文化・歴史・地域計画の学識経験者
6	ウィーン工科大学学際連携センター 技術・観光・景観計画部門主任 マインハルト・ブライリング博士 [01:24:19]	

まず、これらの聞き取り調査のなかで、本研究の問題意識に関連して重要と思われる箇所（立地条件、宗教的な背景、現在の宗教的な意味、環境保全、聖なる意味を守るための訪問者の行動規範）を以下に示す。その後、比較考察を行う。

3 聞き取り調査の概要と比較考察

3.1 伊勢神宮

3.1.1 立地条件

伊勢神宮は日本列島の中央部分の三重県伊勢市に位置し、太平洋が近い場所にある。

伊勢神宮にとっては、立地条件は非常に重要な意味を持っている。日本の多くの神社では、その立地条件は周囲の自然環境と密接な関係がある。神社は伝統的に森、山、川などの近くの美しい自然の風景の中に作られた。それには二つの理由がある。

第一に、実用的な理由である。湧き水が出ることは、飲み水を確保し、水田を作るために重要である。神社があることで水源が大切にされ、保護につながっていた。

第二に、宗教的な理由である。神道の信仰を一言で表現することは難しいが、次の三つの特徴が指摘されている。①地域共同体の先祖への信仰、②天皇家との結びつき、③古い木、岩、泉、川、農耕などの自然物と関係した自然崇拝[8][9]。

伊勢神宮は、天皇家と強い結びつきを持ち(3.2.2 参照)、かつ自然を重視する姿勢を持っている。写真1にみられるように、伊勢神宮は大きな美しい森に囲まれている。



写真1 伊勢神宮(内宮)参道的美観(筆者撮影)。明治時代に芝生と松が加えられた。

伊勢神宮にとっての自然環境の重要性については、音羽悟氏への聞き取り(No.1)の際に何度も言及された。聞き取りの冒頭[~00:05:42]で、音羽氏は人々の生活における清い水の重要性を強調した。伊勢神宮は意図して五十鈴川の隣に作られた。この清浄な水流は、神道において重視される純化(お清め)を象徴しており、水田を営む上での実用性もある。古代日本の記録である『日本書紀』において、第11代垂仁天皇の皇女・倭姫命が日本の中心神である天照大神から神示を受け、伊勢が「うまし国」(美しい土地)でありそこに天照大神のための神殿を建てて祀るように命じられたと記されている(伊勢神宮は1300年前に現在の場所に移されたものであるが、立地の考え方は受け継がれているものと考えられる)。すなわち、活力ある新鮮な空気を提供する森と清浄な水流が周囲にあることが、伊勢神宮の立地として選ばれた第一の条件だったと考えられる。

もう一つの立地条件は伊勢湾に面していることである。日常生活にかかわる観点からは、新鮮な魚介類を得ることができる地だということである。また、宗教的な観点からは、天照

大神は太陽の女神で命の源であるとされているため、太陽が昇る東の方角に伊勢湾を臨む地は聖なる意味を持っている。このことは、岡田(2011)でも指摘されている。また音羽氏の解説によれば、伊勢湾への交通を確保することは、奈良盆地を拠点とする大和朝廷にとって戦略的に重要な立地条件だったと考えられる。大和と伊勢を結ぶことで、いまだ大和朝廷に不服従の勢力が残る東方の地へ朝廷が船を送ることができたのである。大和朝廷が伊勢を東日本への窓口にする戦略を取ったことについては、直木(2009)でも指摘されている[11]。伊勢神宮と周囲の街との関係を尋ねた皇學館大学の田浦雅徳教授への聞き取り調査 (No.5) では、伊勢神宮が先に作られ、その後に街ができていったことが明らかにされた[00:05:54~]。伊勢神宮には 125 の大小の神社があるが、伊勢の街の発展は、中心となる二つの宮、内宮の周辺(宇治)と外宮の周辺(山田)とでそれぞれ展開した。寺社の参道周辺に街が展開するこうした発展の仕方は、日本では「門前町」として知られる形式である。近代に入り、この二つの地域が統合して一つの市域となり、「伊勢市」と呼ばれるようになった。

まとめると、伊勢神宮の立地条件は、主に周囲の恵まれた自然環境、太陽が昇る太平洋に近接していること、そして伊勢湾を利用した大和朝廷の進出戦略という三つの要因により規定されていると考えられる。

3.1.2 宗教的な伝統と重要性

日本の歴史を通じて、天皇家と神道の中心的な社である伊勢神宮は、宗教的に大変重要な役割を果たしてきた。日本において天照大神は天皇家の祖先と考えられている。この流れで、第二次世界大戦末期まで、天皇は生ける神(現人神)であるとさえ考えられていた。しかし神道が国粋主義に利用されたため、戦後、天皇は自らを神ではないとする人間宣言を行った。今日では天皇は神道の最高司祭とされている。

伊勢神宮の宗教的な重要性は、奈良時代(710-794)初期に伊勢への巡礼が始まっていることから見て取ることができる。音羽氏の解説(No.1)によると、奈良・平安時代には、一般の人々は容易に伊勢神宮に参拝することが許されなかった[00:20:15~]。この聖地に直接参拝できるのは勅使(天皇家の使い)と朝廷の構成員に限られていた。

鎌倉時代(1185-1333)に入って、その他の人々が徐々に参拝を許されるようになった。例えば、奈良の東大寺などの大きな仏教寺院において高い地位にある僧侶などである(その当時に仏教と神道とが結びつきを強めたという背景がある)。

江戸時代(1603-1868)には一般の人々がお伊勢参りに訪れることができるようになった。神と参詣者を取り持つ御師(おんし)と呼ばれる特別な役割を持つ神職が一般人の巡礼を担当した。天照大神に参拝することを目的に、日本各地から多くの人々が苦勞を耐えて何百キロもの距離を歩いてきたという事実は注目に値する。このお伊勢参りが日本の前近代における一般の人々にとって最初の観光だったと音羽氏は考えている。

今日の伊勢神宮の宗教的な意味について、訪問する日本人の目的やパターンが変化してきたことについて、音羽氏は次のように指摘している[00:44:30~]。以前は、新年の初詣を

目的に訪れる人たちが主流であったが、今日では、若い人々は年間を通じて訪問する。また、神道の神々を深く信仰する気持ちより、伊勢神宮を癒しの空間、心の拠り所、精神的パワースポットと考えて訪問するようになっている。音羽氏は伊勢神宮の神職であるが、このこと自体はかまわないと考えており、訪問者が伊勢訪問を楽しんでくれることを第一に期待し、機会をとらえてより深い場所の意味や宗教的な重要性を教えることができると考えている。

3.1.3 環境保全と持続可能性の観点

近年、伊勢神宮は境内と鎮守の森、神社の建物群を保全することに熱心に取り組んでいる。しかし音羽氏によるといつの時代もこのように念入りに環境が守られていたわけではなく、江戸後期には周囲の森の木を木材として伐採しすぎて色々な問題が生じている。多くの人々が伊勢に訪れるようになって、より多くの森林資源が必要とされた。例えば、薪、炭、建築材などである。それによって、木で覆われていた山の姿を変えてしまった。その結果、明治時代に入った頃には、宇治橋から見える神路山（かみじやま）はほとんどすべての木が切り倒されたはげ山になってしまった[00:35:05~]。

そして大正時代（1912-1926）、1918年に1時間に350ミリの大雨があり、伊勢神宮周辺地域で大規模な洪水が起こった。五十鈴川が氾濫し、堤防が100か所以上決壊した。伊勢神宮の門前町の家々はすべて浸水した。

この状況に対処するために伊勢神宮は森林管理計画を策定することとし、東京帝国大学の本多静六博士（1866-1952）と川瀬善太郎博士（1862-1932）がこれにあたった。この計画の目的は次の三点である。

1. 古来の豊かな「鎮守の森」の考え方を見直すこと。
2. 雨が多く降っても洪水が起こらないように地下で水を保つこと（涵養）を促進すること。多くの樹木があることで、その根がスポンジの役割を果たし、水は一時的に保たれて徐々に川へと流れていくようになる。
3. 二十年ごとに行われる伊勢神宮の再建（神宮式年遷宮）のための木材となるヒノキを、御廬山（みそまやま）の神宮所有の聖なる森からまかなえるようにすること。

さらに、美観を考慮して、広葉樹、落葉樹を神宮周辺の斜面に植え、常緑の針葉樹を神宮背後の山に植えることを計画した。

その結果、神宮の周りは徐々に自然の森と人工林とが融合した森に囲まれるようになり、以後、強い台風が来ても五十鈴川が氾濫することは二度となくなった。今日では伊勢神宮はこの人工林と自然林とが組み合わさった境内の内外の広大な森林を管理している。

伊勢神宮のもう一つの特徴的な環境保全の方法は、上に述べた式年遷宮に関係している。式年遷宮とは、20年ごとにすべての建物、宝物などの人工物を一つ残らず作り直す儀式である。ヨーロッパでは、もともとの歴史的な建物をできるだけ長く使えるように手入れすることが「保全」であるとする。したがって、20年ごとにすべてを作り直すということは古いものを破壊して新たに建てるということの意味するので、「保全」とは考えられない。

しかし、日本の湿った気候と、神社の建物が木造であることから考えると、ヨーロッパ式の修繕中心の方法では「保全」の目的を遂げることが大変難しく、日本の方法のほうが適していることがわかる。さらに、神社のすべての建物を20年ごとに作り直すことで、宮大工の技術が次世代に引き継がれることと、神社の建物群の形が保全されることが同時に達成される。このように規則的で、費用がかかり、細部にわたって念入りの再建は日本においてさえも珍しいケースである。



写真2 2013年の式年遷宮を終えた伊勢神宮の内宮本殿。2033年まで使用される。
(伊勢神宮司庁撮影)

3.1.4 観光政策、聖地における規則、訪問者を受け入れる姿勢

江戸時代には、伊勢神宮にはつねに参拝者がたえなかったが、第二次世界大戦後はその数が減少した。それには複数の原因が考えられるが、なかでも移動手段の自動化がもたらした影響として、かつては全ての参拝者が門前町を通して神宮に参拝していたのが、約40年前から車やバスで直接神宮に参拝するようになった。もともと和菓子の会社だった赤福株式会社はこの状況に気づき、伊勢市と三重県の協力を得て、伊勢神宮の参道に隣接する場所を、観光のためにデザインし直して、歴史的な景観を持つ「おはらいまち」を建設した。その後、多くの訪問者がこの参道を楽しみながら通るようになり、近年、訪問者の数は再び増加している。

音羽氏と田浦教授の両名がインタビューで述べていたように、現代の伊勢観光政策立案において重要な点の一つは、三重県と伊勢市の行政当局が、最近になって伊勢神宮との協力関係を改善したことにある。20年前、行政当局と伊勢神宮とは、第二次大戦後の政教分離の影響で、お互いに連絡を取り合うことがあまりなくなっていた。だが今やこの障壁は取り除かれているように思われる。今日、伊勢市の観光ガイドたち（英語のガイドを含む）は、神宮の境内でのふるまい方や作法について、神宮から直接教えられる機会を持つようになった。境内において、観光客がどのようなふるまいを期待されるかということ、原則として、

神宮への訪問と参拝は無料であり、背景や信仰にかかわらずすべての人に開かれている。有料なのは、神道の作法にのっとった正式参拝を行う場合である。正式参拝を行う場合は、服装も正装が求められる。境内では飲食は禁じられている。作法にのっとった行為と、身心を清めることは、神道にとって非常に重要なこととされており、鳥居で一礼することや、手水舎で手と口を清めることが推奨されている。また、外国人にはしばしば理解されにくいことではあるが、本殿とその前に置かれた祈る場所を撮影することは禁じられている。これは神道において「神は目に見えない」ものであり、それを写真によって「とらえる」ことは良いことではない、という古くからの伝統があるためである。

音羽氏（神宮司庁広報課）と加納氏（三重県観光政策課）によれば、伊勢神宮を訪問する外国人でこのようなマナーを破る人は少ないとのことである。だが一方で、伊勢を訪問する外国人観光客の数自体が少ないことも指摘されている。これは、伊勢が東京や大阪のような都市からは（実際はそれほどではないが）遠い印象を与えるからではないかと考えられる。

3.2 クロスターノイブルク修道院



写真3 クロスターノイブルク修道院とワインづくりのためのぶどう畑
(©Stift Klosterneuburg, Michael Zechany)

3.2.1 立地条件

聖アウグスチノ修道会クロスターノイブルク修道院はオーストリアの首都ウィーンから15キロほど離れた郊外に位置している。この聖地の立地にも理由があり、偶然ではない。しかしながら、キリスト教の信仰と日本神道の伝統との間には聖地の立地に関する考えにもちがいがあり、クロスターノイブルク修道院では自然とのつながり、ましてや自然崇拜といった考えからこの立地が選ばれたわけではない。キリスト教の信仰活動は教会のなかで行われるものであり、神道のように外の広い場所で行われるものではない。

クロスターノイブルク修道院文化・観光マーケティング部門部長のフラグナー氏は、インタ

ビューNo.2[00:15:03~]において、同修道院の立地には軍事戦略的な理由があると強調している。同修道院が宗教的な理由から郊外に位置しているのか、と尋ねたところ、フラグナー氏は次のように答えた。「そうではないと思います。ここ、クロスターノイブルクはローマ時代の植民都市で、紀元 500 年ころまでは大きな軍事要塞だったのです。今いるまさにこの場所にローマ時代の掘削の穴があります。立地条件は純粹に、(この地の領主として)ここに住み着いたバーベンベルク家のレオポルト 3 世の戦略によるものです。以前、ドナウ川は(かつての要塞で、今の)修道院のすぐそばを流れていました。それで、川の水を直接利用することができたのです。また、ドナウ川はここで小さなカーブを作っていました。この場所(丘の上)からは、周辺地域のすべての方向を見下ろすことができます。」

フラグナー氏はさらに、修道院では日常生活に必要なすべてのものを自給自足、自作自農でまかなうことが非常に重要であることに言及した([00:03:30])。安定した自足生活を確かにするのに必要なものは、土地と農業である。そのため、修道院は畑と果樹園に囲まれており、それが文化的景観を形成している。クロスターノイブルク修道院では、ワイン製造が当初から重要な経済的要素であった。さらにクロスターノイブルクは特別に豊かな修道院でもあった。1114 年に領主のレオポルト 3 世から寛大な土地寄進があったためである。修道院には初めに決めた土地の所有権に関する重要な定めがあった。所有する土地の一部を売る場合には、同等の質の土地を買い直さなければならない、という定めである。この政策が修道院設立の最初期からあったおかげで、この修道院は、傘下にある 28 の地域教会や国外の支部における修道士の活動や、精神的なカウンセリングを支える活動資金にも恵まれたのである。それに加えて、後に聖人に列せられオーストリアの守護者となった当地の領主レオポルト 3 世の墓所ともなったのである。このことは同修道院にとって、また、後にはハプスブルク家にとって、きわめて重要な意味を持つことになる。すなわち、クロスターノイブルク修道院の立地条件は、当地の領主とキリスト教会の力を確実にする戦略を反映したものであった。その戦略は、農耕地としての利用を含めて、地域の発展にも適したものであった。自前の農業とぶどう果樹園を経営していた同修道院は、地域の人々を雇用することもできた。この点はブライリング博士(インタビューNo.6)によって強調されたことである。すなわち、この修道院は、信仰のための精神的な中心地であるにもかかわらず、同時にまたその最初期から世俗に生きる人々が生活上必要とするものをも満たしたのである。

3.2.2 宗教的な伝統と重要性

クロスターノイブルク修道院はオーストリア最大のカトリック系修道院であり、創立者の聖レオポルトはオーストリアの守護聖人でもある。この意味において、日本における伊勢神宮と同様に、国全体のレベルでの重要性を持っている。また領主だったレオポルトが死後に聖人に列せられたことで、中世以来、今日まで巡礼の地ともなっている。レオポルトは領民を深く慈しみ、知恵を持って治め、子どもたちにも優しく接し、決して平民を見下すようなことはなかった、と言われている。この時代の他の領主たちとは異なり、レオポルトは他

国との戦争を避けることに努めていた。このことは人々の間で大いなる共感と称賛を呼び、それが、後に彼が聖人に列せられた理由でもある[9]。

クロスターノイブルク修道院が聖地であることの理由として、何が最も宗教的に重要な要因か尋ねたところ、フラグナー氏は、当地が古代から信仰の地であり続けたこととともに、教学の拠点でもあったことを強調した。同修道院には蔵書数 30 万冊のオーストリア最大の私立図書館があり、そのなかには中世の時代からの約 1,200 件の手書き文献が含まれている。加えて、(日本の伊勢神宮とは異なり) 全体的な立地条件としては、聖地として特徴づけられる要因は特になく、とも指摘している[00:09:34~]。ただし、修道院の建物の内部には三つの聖なる場所が存在する。聖レオポルトの遺体がおさめられているレオポルト教会、すべての修道士が死後に遺体をおさめられる泉の家、そして、日々の祈りや儀式を行うための協同教会である。

3.2.3 環境保全と持続可能性の観点

経済的な観点からみると、地域の安定した職場提供と雇用に貢献しているという意味で、クロスターノイブルク修道院は持続可能性を実現していると考えられる。しかしそれ以上に、環境保全の観点からみた持続可能性が際立っている。100 ヘクタール以上のぶどう畑が 900 年にわたって修道院自体によって営まれており、二酸化炭素排出を抑制し、減農薬で、できるだけ少ない肥料でぶどうを栽培している。それに加えて、240 ヘクタールの無農薬の穀物畑や果樹園が経営されている。これらの実践についての詳細は、同修道院ワインプロダクトマネージャーのヴォルフガング・ハム博士から筆者に対して教えられたものであり、また、レッテンバッハの著作[12]でも指摘されている。場所と建物の物理的な保存という観点からみると、建物全体、宝物、古書・稀覯書、協同教会の保存と修復には特に念入りに対応が行われる。筆者の訪問時にこれらは顕著によい状態であることが確認された。これらの手入れのためには、費用や手間は惜しまれない。2014 年に、何千万ユーロもの費用をかけて全体的な修復と清掃が行われた。そのうち大半は修道院が自ら支出し、残りの一部を国が支援した。

3.2.4 観光政策、聖地における規則、訪問者を受け入れる姿勢

クロスターノイブルク修道院では、世界中のあらゆる信仰を持つ人々の訪問を受け入れている。実際、伊勢神宮への外国人訪問者の割合はわずか 2 パーセントだが、クロスターノイブルク修道院への (オーストリア以外からの) 外国人訪問客は約 40 パーセントに及ぶ。新しくデザインされた公式ウェブサイトは英語や中国語、日本語などの様々な言語で書かれている。修道院の歴史的な建造物、ワイン倉庫、宝物、特別展示などの見学のためには、入場料を支払う必要がある。しかし、宗教的な儀式に参加することは無料である。この点は伊勢神宮 (入場料無料、正式参拝は有料) の場合と逆である。儀式への参加は、現在ではカトリック信者に限らず、プロテスタントや他の信仰を持つ人であっても、希望すれば可能である。

近年では訪問客の増加により、年間 10 万人もの人々がクロスターノイブルク修道院に訪れるようになった。このまま増え続けると宗教的な雰囲気が失われるので、コントロールが必要になるかもしれない。誰にでも開かれている、ということは、マス・ツーリズムを許すということではない。フラグナー氏はインタビューのなかで、質の高い文化観光こそが目的である、と語っている。例えば、あるグループが、半ばプライベートな雰囲気で教会を訪問しているときには、次のグループが入ってきて邪魔をしないようにする、といったことが大事である。クロスターノイブルク修道院では、子どもや家族が手づくりの作業を体験できる文化的、芸術的な学習の場も提供している。観光客が写真を撮ることについては、(伊勢とは対照的に) 儀式の場面を除いて、教会や修道院の内観や外観を撮影することは自由である。さらに、服装についても、現在では正装で訪問する必要はない(イタリアのローマ・カトリック教会などでは正装を求めるところもある)。フラグナー氏によれば、観光客が悪質なふるまいをすることは少なく、ごくたまに、アイスクリームを教会や宝物館の中で食べたり、ワインを飲みすぎて酔っぱらった状態で教会に入ったりする人がいるが、これは例外的である。総じて、世界中から訪問する人々は、ふさわしいふるまいをしており、スティックを使って自撮りするような人もいない。

また、ニーダーエスターライヒ州の観光政策関連団体であるニーダーエスターライヒ地域広告事業団戦略管理事業部門のシュテファン・バウアー氏は、インタビューNo.4において、多数の修道院を持つこの地域における巡礼観光の意義を語っている。例えば、マリアツェルなどの巡礼の目的地が多数ある地では、地元で生産されたワインや果物、ハーブなどを楽しんだり、文化的な要素を楽しんだり、美しい田舎の環境を楽しんだりでき、それらは教会や修道院が提供しているものもある。このような持続可能な新しい観光の形は様々な層の人々にとって人気が高い。

4 まとめと考察

冒頭に挙げた問いに対して、本論文ですべて答えることはできないが、現時点で得られた結果から言えることを考察したい。

第一の問いは、「聖地に神聖な意味を与えるものは何か。その神聖な意味を守るために必要なものは何か。この観点から、日本の神社とキリスト教の教会や修道院との主要な違いは何か」であった。

これに関して、インタビューに応じて下さった関係者の方々は、いずれも「信仰の場所としての重要性が第一で、長い歴史や文化的な遺産を楽しんでもらうことはその次のものだ」と述べている。あらゆる国の人々が訪問できるよう開かれており、服装規定などが緩やかになっているとしても、訪問者はその場所の神聖な意味を理解してふるまうしてほしい、という考えは共通であった。ほとんどの観光客は外国の観光地の宗教の信仰を(あるいは自国内の宗教の信仰さえ)十分に知らないかもしれないが、驚くことに、伊勢でもクロスターノイブルクでも、多くの観光客は聖地にふさわしいふるまいをしていた。しかし、違いも見られた。

伊勢神宮で、「その場所に神聖な意味を与え、その神聖な意味を守るもの」は、何よりも「清められた状態を守ること」であり、それは儀式や作法を通じて実現される。物理的には、自然環境と神社の建物が清浄であるように保つことであり、精神的には、心的態度を清めること、目に見えない聖なるものへの敬意を表することである。

クロスターノイブルク修道院で、「その場所に神聖な意味を与え、その神聖な意味を守るもの」は、むしろ、教会や各地の拠点の中で行われる宗教的な行為や、日曜礼拝など無料ですべての人々に提供される教会のサービス、そして、聖なる創造物として人間に与えられた「母なる自然」を丁寧に保護しながら、環境にやさしい方法で農業と環境保全を行うことである。

さらに伊勢神宮とは対照的に、クロスターノイブルク修道院においては、今日に至るまで修道院での教学が常に重視されてきた、という違いがある。今日、同修道院ではそれを反映した様々な文化的な研究・学習の機会が、各種の展示や体験学習の場として提供されている。とはいえ、伊勢神宮も以前とは異なり、今日ではこうした研究・学習に資する新しい博物館を備え、外国人を含めた訪問者が当地について学ぶ機会を以前よりも多く提供するようになってきている。

第二の問いは、「聖地を訪れる観光客の行動、ふるまいはどのようなものか」であった。これについては、次のことが明らかになった。

- a) 人々は、これらの宗教的な聖地を訪れる際、概して態度よくふるまっている。
- b) 人々は、様々な理由で宗教的な聖地を訪れるが、多くの人たちは、いくらかの宗教的な理由と、それ以上に大きいこの世の楽しみとの両方を目的としているように見受けられる。クロスターノイブルク修道院においては、協同教会を訪れた後、美味なワインを楽しんだり、修道院のレストランで食事をしたりすることができる。伊勢神宮では、人々は、参拝の後に甘味やお茶を楽しんでいる。この点で両者の間に大きな違いはない。古代以来、東西文化の双方において、聖なるものと世俗の楽しみとが「パッケージ」あるいは「セット」になって巡礼が行われていることは大変興味深い現象である。

そして、第三の問いは、「これらの聖地への観光に伴う問題があるとすれば、観光倫理の改善のために何が必要か」であった。これについては、両者に違いが見られた。

かつては、生活における困難は外的要因による物理的な困難が大きかったが、今日では、むしろ心の中の問題、内的要因による苦悩がより大きな問題となっているように思われる。インタビューに答えて下さった関係者の方々は異口同音にこの傾向性が確かであることを著者に語られた。

ささやかで素敵な世俗の楽しみを得ることは、筆者を含め、ほとんどすべての人にとって好ましいものであるだろう。だが、それに加えて、多くの人にとっては、「よりよい人生、意義深い人生を求める」ということも、聖地訪問の動機であるだろう。

伊勢とクロスターノイブルクでのインタビューを通じて時折筆者が残念に感じたことは、そのような聖地訪問を通じて「よりよい人生、意義深い人生を求める」という観点、例えば

「心の平安を得るための導き」などへの言及があまりなかったことである。

確かに、このような問いへの答えは単純ではない。人間は一人ひとり異なり、抱えている問題や求めているものも同じではないからだ。しかしながら、聖地を訪問する人々で、特に何か深い意義を求めている人に対しては、聖地が持つより深い意味を体験してもらったり、特別な精神的な経験を得られたりするような導きとして、何かもっとできることがあるのではないだろうか。このことについては、今後さらに研究を深める必要がある。

謝辞

本論文は平成28年度上廣倫理財団研究助成により進められた研究の成果です。貴重な研究の機会を頂いたことを同財団に心から感謝申し上げます。

皇學館大学の岩崎正彌先生には、伊勢の現地調査に関するすべてのアレンジと、伊勢での聞き取り調査結果の文字起こし、日本語訳に至るまで多大なご支援を頂きました。言葉では表し切れないほどのお力添えに、心から感謝申し上げます。

また東海大学の竹之内禎先生には、本研究に際して翻訳の支援と助言を多く頂きました。

オックスフォード大学のアリス・フリーマン博士は、英文の校正と論文への有益な助言を下さいました。

そして、貴重なお時間を割いて本研究の聞き取り調査に快く応じて下さったすべての方々に、心から御礼を申し上げます。

最後になりますが、いつも家を留守にすることに理解を示してくれた妻の道子に感謝を述べたいと思います。

参考文献

- [1] ITB World Travel Trends Report 2016 / 2017. Prepared by IPK International on behalf of ITB Berlin – The World's Leading Travel Trade Show® Online, <https://www.itb-berlin.de/Presse/Downloads/Publikationen/>. Accessed on: 27 Dec. 2017.
- [2] 日本政府観光局 (JNTO), Statistical Information, Online, www.jnto.go.jp/eng/ttp/sta/index.html. Accessed on: 27 Dec. 2017.
- [3] World Tourism Organization, Global Code of Ethics for Tourism, 1999, Online, <http://ethics.unwto.org/en/content/global-code-ethics-tourism>. Accessed on: 27 Dec. 2017.
- [4] 原一樹「観光倫理学の展開に向けた準備的考察－英語圏先行研究からの課題整理－」日本観光研究学会第31回全国大会要綱, pp. 341-344, 2016.
- [5] Raij, R. & Griffin, K. (eds), Religious Tourism and Pilgrimage Management, An International Perspective, second edition, CAB International, 2015.
- [6] Graphard, A.G., Flying Mountains and Walkers of Emptiness: Towards a Definition of Sacred Space in Japanese Religions. University of Chicago, History of Religions 21, pp.

195–221, 1982.

- [7] Poggendorf, L., Innovative Cultural Tourism on the German River Rhine – Regional Development and Local Success: How the Monastery Kloster Eberbach Sets New Standards. Toyo University, *Journal of Tourism Studies* 16, pp. 97–116, 2017.
- [8] Naumann, N., Schintô und Volksreligion – Japanische Religiösität im historischen Kontext, (eds) In: *Geschichte der religiösen Ideen*, by Mircea Eliade, Bd. III/2, Freiburg/Br., pp. 304 – 324, 1991.
- [9] Sonoda, M., Shinto and The Natural Environment, Shinto in History. Ways of the kami J. Breen, Teeuwen, M. . Honolulu, Hawai, University of Hawai’I Press: pp. 32–46, 2000.
- [10] 岡田精司『古代王権の祭祀と神話』塙書房, 2011
- [11] 直木孝次郎『伊勢神宮と古代の神々』吉川弘文館, 2009
- [12] Redtenbacher, A., *Wo sich Wege kreuzen – 900 Jahre Augustiner Chorherrenstift Klosterneuburg*, Herder Verlag, 2013.